

# 2015 年度活動報告 学部授業：日本語Ⅲ

森本 郁代（関西学院大学法学部）

内藤 真理子（関西学院大学日本語教育センター）

## 1. 到達目標

2 年生対象の日本語Ⅲでは、1 年生で培った基礎的な日本語力を土台に、大学におけるアカデミックな活動に日本人学生と同等に参加できるレベルの日本語の能力（読む・書く・聞く・話す）のさらなる伸長を図るために、特に自分の意見を述べたり批評したりする力を養うことを目的とする。

## 2. 2015 年度の授業内容

週 2 回の授業のうち、水曜日は「話す・聞く能力」、金曜日は「読む・書く能力」の育成を目的とした授業を行っている。

### 2.1 水曜日

14 回の授業を通してディベートの活動を行った。前半の 8 回の授業では、ディベートの説明、ミニディベートによる練習、試合の準備を行い、後半の 6 回の授業では試合を行った。前半の授業では、ディベートの流れを理解することと、討論に慣れることを目的とし、単純なピンポンディベートから徐々に複雑なディベートになるように配置したミニディベートを段階的に取り入れた。また、主張・理由・資料の 3 つが整った説得力のある議論ができるよう、十字モデル<sup>1</sup>を利用した。試合は 2 回をクラス内の練習として行い、残りの 4 回のうち前半 2 回をクラス内、後半 2 回をクラス対抗で行った。ディベートの論題は全クラス共通で「男性正規労働者の育児休業を義務付けるべきである」「大学入試に TOEFL を導入すべきである」とした。

### 2.2 金曜日

新書『希望学』玄田有史（編著）中公新書ラクレ）をテキストとして、グループに分かれて行うピア・リーディング活動を行い、互いの見方や解釈を共有することでテキストの理解を深め、意見や批評の論点を発見することを試みた。併せて、各章のレジュメと要約の作成を課し、内容を簡潔に要約する力と、理解した内容を分かりやすく説明する力の育成を行った。最後に、テキスト全体の批評文を 1500 字程度で書き、

---

<sup>1</sup> 牧野由香里（2010）「対話の進化を可視化する知識構築の十字モデル」『日本教育工学会研究報告集』10-3, pp133-140

批判的思考力の養成とともに、自分の意見や批評をある程度の長さの文章で書く能力の向上を図った。

### 3. 成果と今後の課題

#### 3.1 水曜日

本年度は、新たな試みとして論題の作成を教員が行うこととした。前年度までは論題の作り方について指導したのち、学生に考えさせていたが、1) 授業目標に照らすと学生による論題作成は優先順位が低いこと、2) 論題の作成方法の説明などで時間がかかること、3) 討論しにくい論題が選ばれてしまう可能性があること、の3点から教員が作成したほうが良いと判断したためである。その結果、本年度はディベートの練習や準備に割く時間が長くなり、前年度にくらべ余裕をもって授業を進めることができた。また、教員による論題作成について、担当教員に対して半構造化インタビューを行ったところ、おおむね高い評価を得ていることがわかった。しかし、煩雑であったという意見もあり、次年度は教員による論題作成作業の簡略化を検討したい<sup>2</sup>。

#### 3.2 金曜日

本年度は新しいテキストを採用した。このテキストは、「希望学」という共通のテーマの下で書かれた独立した論文で各章が構成されているため、ジグソーリーディングが進めやすく、また内容も学生にとって身近であったせいか、おおむね好評であった。レジユメの作成も、回を追うごとに上達し、一定の成果が見られた。その一方で、ピア活動になじめない学生の存在や、テキストからうまく論点が抽出できないなどの課題も見られた。ピア活動のデザインと、論点を抽出するトレーニングの方法の検討が今後の課題である。

---

<sup>2</sup> 内藤真理子・西村由美・竹内茜 (2015) 「ディベートの論題選びについての実践報告」『日本語教育方法研究会誌』22-2, pp.32-33 に詳述。